講　演

ナイチンゲール看護の現代的意義

小　玉　香津子
（神奈川県立衛生短期大学教授）

はじめに

タイムレス（Timeless）という言葉があるのをご存じですか。タイムレス（Timeless），時を越えたという意味です。フロレンス・ナイチンゲールの看護はまさに時を越えています。1つは，それは変わりようのない真実だからです。もう1つには，フロレンス・ナイチンゲールの看護は驚くべき先見性があるからです。もっとも，先をみているので時を越えて今も新しく，もっと先まで新しい先見性があるということは真実であるということとつながるわけですが。

例をあげましょうか。WHOが最近フロレンス・ナイチンゲールに非常に関心を寄せています。そもそもWHOの健康の定義は，健康とは単に病気ではないとうだけでなく，我々が使うべくもっている力のひとつひとつを十分に使うことのできる状態であるという彼女の健康の定義を踏まえているのだろうと私はかねて思っているのですが，そのWHOが，ナイチンゲールが従姉妹にあてた手紙の1つから，こんな1文を見つけて「ワールドヘルス」という雑誌にのせているのです。ちなみに，その従姉妹はヒラリー・ボナム・カーターで，みなさん，ナイチンゲール著作集の中に挿絵のついた論文があるのを覚えていますか。あの挿絵を書いたのがヒラリー・ボナム・カーターです。ナイチンゲールがとても気にいっていた従姉妹でして知的にも通ずるところがあったのでしょう，だからこんな手紙を書いたと思われます。「ねぇヒラリー，私は結局のところ全ての病人は，それぞれの家庭で療養するのが一番いいと思います。もっとも，2000年のことを今言っても仕方ありませんけどね。」その今というのは19世紀の中ばすぎの彼女の時代，2000年のことというのは，私たちの今です。在宅療養，地域ケア，脱病院，がさかんにいわれている今，です。これは驚くべき先見性の1つでなくて何でしょうか。

もう1つ例をあげましょうか。イギリスではNational Health Service, NHSが，いろいろ問題はありながらも世界に先がけて人々の健康を守る組織として発達しているのはご存じのとおりです。このNHSは，実は，フロレンス・ナイチンゲールの，全ての病院が地域医療の部門を持つべきだという発言にヒントを得て生まれてきたのです。つまり，NHSのようなサービスのありかたが人々の健康のために好ましい，ということを前世紀のうちにナイチンゲールは見てとっていました。

ところで今日は，ナイチンゲールの看護の真実，何をもってそう言えるか，どのような経過で今なおタイムレス（Timeless）なのか，そして今の私たちにとって彼女の看護はどういう意味をもっているのか，といったすじでいっしょに考えていきましょう。

健康にとって最善の状態にその人をおく

ナイチンゲールは，看護をこんなふうに説明します。130年前のことです。先ず最初に，病気の看護ではありません，病人の看護です，ということを強調して，その病人の看護はどういうことかというと病気の人，あるいは幼い者が，どこかが痛かったり息苦しかったり，寒気がしたりあるいはまた疎外感とか孤立感といった苦痛に捕らわれているとしたら，それは十中八九，いえそれ以上に病気のせいではなく別のことが原因であるというのです。別のこととは何か，それは，新鮮な空気，お日様の光，暖かさ，静さ，清潔，規則正しく必要十分な食事，あるいはまた気分転換，安心，人格の尊重，そういったことのどれか1つ，あるいは2つ，もしかしたらもっと，もしかしたら全部，がかけている状態です。それが原因で，病人の苦痛の殆どがおこってくるのです。そしてその苦痛を取り除くのが看護なのです。

つまり，新鮮な空気，お日様の光，暖かさ，静さ，清潔，適切な食事，それらを病気の人や幼い者に，あるいはお産の床にいる人や今の時代なら高齢の方に，とどこおりなく与える，あるいはとどこおりなく与えられるように手配する，また，病気の人や幼い者や産褥の人や年をとった方の心を波立たせることのないように，人間としての尊厳を傷つけることがないように，看護する者自身をはじめその病人や幼い者の周辺の人々の言葉や動作に気を配る，まとめて言えば，病人の回復，幼い者の健康な成長，今日的に言えばお年寄りの健康な老いのために，最も良い状態にその人を置く，これが看護だとナイチンゲールはいうのです。そして，1860年の時点では病気を癒すのは自然，子供を丈夫に育てるのは自然という認識ですから，ナイチンゲールは看護を次のように定義します。「看護のしなければならないことは自然が病人に働きかけるように最善な状態に病人を置くことである。」～幼い者を置くことである，産婦を置くことである，高齢者を置くことである，とナイチンゲールは看護を定義します。

では，どうしたらベストの状態にその人を置くことができるでしょうか。そのベストの状態とは取りも直さず病気とは別のことからくる苦痛がない状態ですから，病気とは別の苦しみの原因，病気とは直接関係のない苦しみの原因がないようにすることがベストの状態をつくりだすことなのです。つまり，病気の人や幼い者の呼吸する空気，食べ物，食事，清潔，気分転換，人格の尊重，それらを申し分なく整えることが最善の状態にその人を置くことです。しかもそれらはただ整えればよいわけではない，その人の生命力が少しも犠牲にされないようにしてそれらを整えなければならない，これが看護であるとフロレンス・ナイチンゲールは世に示しました。

実のところは，病人の回復や幼い者の健康な成長にはこういうことがなくてはならないと，いう気づきをまず彼女はしました。こういうことはいったいなんと呼べばよいのだろう，困った，ぴったりするわけではないけれどやっぱり看護にしておこう，と考えたのです。そのころ彼女のまわりにあった看護はこれとはかなり違っていました。それでよくよく考えたけれど，でもこれが看護であるべきなのだと考えて彼女は，他によい言葉がないからこれを看護と呼ぼうといったのです。これを衛生と呼ぼう，と彼女がいったとしたら，いま私たちはどんなことになっていたでしょうか。私たち看護婦はナイチンゲールがこれを看護と呼んだことに負うところすこぶる大であります。

看護発見の道すじ

ナイチンゲールの看護は，歴史のなかからの発見，厳密に言えば再発見かもしれません。そもそもはギリシャのヒポクラテスが紀元前5世紀に，いっさいの障害を避けて自然の治

癒を待つといっています。食事を正しく，よい空気を吸って，生活のリズムを整えて……いっさいの障害を避けて自然の治癒を待つ，と。時代は下ってヨーロッパの中世の健康思想にこのヒポクラテスの流れを汲む，6つの自然のままにほおっておかないこと，Six Non Naturalsがあります。自然のままにほおっておかない6つというのは，光と空気，食べ物と飲み物，運動と休息，眠りと目覚め，排泄，こころの動き，でして，この6つについては人間は自然のままにほおっておかないで頭を使いそれぞれの経験を生かして整える，それが健康への道であり回復への道でもあるというのです。このSix Non Naturalsはいわゆる養生法につながります。日本にも貝原益軒の『養生訓』があるでしょう。しかしこの健康思想は養生法という形で医の実践の一部としてヨーロッパでも生き続けたのですけれども，科学としての医学の発達につれてそうした医の実践は片隅においやられていき，ほとんど消えてしまいました。そして人々は，こと健康に関しては自分で頭を使い，経験を生かすという努力をすることを止めてしまいます。科学的な医学に全面的に頼るようになりました。それを代表するのが，医師です。ナイチンゲールの時代19世紀はまさにそういう時代でした。こと健康に関しては医師に頼ればいい。そういう時代だったのです。こと健康のことに関して人々が責任をもたなくなった様子を，彼女は『覚え書』の中でこんなふうにいっています。「母親たちさえも自分のこどもが健康に生きるにはどうしたらよいかを学ぶことは，自分には関係のないこと価値のないことだと思うようになった。母親たちは自分のこどもたちが健康に生きるようにするにはどうしたらよいかということを医者だけがもつに相応しい医学あるいは生理学の知識だと思っている。」

ナイチンゲールはやれやれと落胆し，怒っています。そしてナイチンゲールは，こどもたちが健康に生きるようにするためにはどうしたらよいのかの答えをSix Non Naturalsのような思想の実践につなげ，さらに，Six Non Naturalsのようなことをそもそもは病気の人のために整えることを看護と名付けたのです。ですからナイチンゲールがこれが看護だといった中身はSix Non Naturalsの再発見であるということもできるのですが，しかしSix Non Naturals，のようなことを病気の人のために整えることを看護であるとしたのは彼女がはじめてで，これはやはり発見です。まったく新しい見方を彼女はしたのですから。私はこの発見は，同じ19世紀にキューリ夫人がラジウムを発見したのと同じように価値ある発見だと思っています。

ところで，ナイチンゲールはどうしてこのような発見をできたのでしょう。それはやはり，クリミアの経験からなのです。1854年の秋，でしたね，38人の看護婦を連れてナイチンゲールはスクタリにやってきました。黒海のトルコ側のスクタリにイギリス軍の大兵舎病院はありました。彼女の一行が着いたときの大兵舎病院の死亡率は42.7%です。そして半年後の春その死亡率は2.1%になっていました。これが有名な前後統計といわれるものです。42.7%が半年間で2.1%になったというのは劇的な前後統計です。そしてその間に作用した変化因子は，ナイチンゲールの一行がきたというそのことだけなのです。もっと端的にいえば，ナイチンゲールがそこにきた，というそのことだけなのです。そこで彼女のしたことはといえば，病気の兵士たちの生活と衛生の改善でした。生活という中にはこころの生活も入ります。病気の兵士たちの生活と衛生の改善だけなのです，そこに作用した変化因子は。

今，病気の兵士たちといいましたけれども，クリミア戦争の時もまだまだ負傷した兵士よりもコレラやチフスあるいは結核といった病気にかかる兵士の方が圧倒的に多かったので

す。戦争の場では外科的な処置の必要ばかりかと思いますがそうではなくて，ごく新しい戦争まで戦死者よりも病死者のほうがかなり多いのです。ナイチンゲールはそこで，こころの生活も含めた兵士たちの生活と衛生の改善をおこないました。つまり新鮮な空気，食べられるような食事を提供し，清潔にからだを洗って清潔なシャツを着せ，たとえば兵士が亡くなる時にはどんなときにも必ずナイチンゲール自身がそばにつきそうなど，彼らに安心感を与え，少しよくなった兵士たちにはイギリスの家族に手紙をかかせたり，レクリェーションを用意したりして彼らの精神に光をあて，つまり生活の改善と衛生の改善が一体となった看護をしたのです。このクリミアの経験が彼女に教えた，と私は思います。クリミア従軍は彼女にとってエピソードにすぎないという見方もありますが，クリミアは彼女の出発点です。それも，帰国に際しての「私は忘れない」という言葉が伝えているように，心情的に兵士たちの実に気の毒な状態にこころ動かされて陸軍衛生の改善に取り組む出発点となっただけではなく，彼女が自分の方法をつかんだ，そのきっかけがクリミアの経験にあるのだと思います。もちろん，勉強好きの彼女でしたから，Six Non Naturals のような知識とクリミアの経験が彼女の中で一緒になったのでしょう。それから，19世紀のイギリスには世界にさきがけて自然を志向する思想がありました。われわれの場合は今世紀になってからですが，19世紀いっぱいまで歴史のトップを走っていた国ですから，すでに自然志向思想が育っていました。ですからナイチンゲールはそちらからも影響を受けた可能性がじゅうぶんあります。しかし，クリミアの経験は彼女だけのものです。とにかく彼女が看護を発見したのです。彼女が看護と呼んだもの，クリミアの経験とその他のもろもろの条件がそろって，彼女の知性と感性がそれを発見したというふうにいえると思います。

ナイチンゲールの看護，病人の生命力を少しも犠牲にしないで全てを整えて癒す力（自然）が働きかけるように最善の状態に病人を置く，この全てというのがクリミアの場合でいえば，生活と衛生でした。これは，看護の原形であるということができると思います。もちろん，このような看護ではとり除けない，病気とは別のことが原因ではない，病気につきものの苦痛があるでしょう，と彼女はいいます。しかし，とナイチンゲールは続けて，看護は他のなによりもまず癒す力（自然）が働きかけるようにベストの状態にその人をおく努力をしよう，病気につきものの苦痛についてはその努力が完全にできた時点でよいというのです。生命力を少しも犠牲にしないで全てをベストの状態に整えることを完全にしようとしてもそう簡単にはいきません。つまりモンブランのてっぺんを健康に適した人間の住む地にすることはそう簡単にできそうもないのと同じだといっているわけです。そしてさらにいいます。看護が病人の病気とは別のことからくる苦痛，全てを整えるがうまくいっていないことからくる苦痛，それをもし全部取り去ることができるとしたらその時こそ病気につきものの苦痛，病気そのもの，がはっきりわかるでしょう，と。これは非常に大事な指摘です。どうして大事かというと，このことは，こと人間の健康に関してはケア（今日の話では，ケアは看護の同義語です）が土台であるという真理を言っているからです。ケアはいつも必要なものです。そしてキュア，治療は時に必要なものです。現代では，ナイチンゲールの時代と比べものにならないくらい病気につきものの苦痛は明らかにされており，そこに正面からとりくんでいるキュアも極めて有力になっていますが，それでもなお看護は，病気とは別のところからくる病人の苦痛をとことん取り除く，すなわち Six Non Naturals のようなこと，こころとからだの生活と衛生，をその人の生命力を少しも犠

牲にしないで整える，そのことをいつもなによりも優先させて行うということをわれわれは読み取らねばなりません。全てを整えてベストの状態にその人を置く，そういうケアがあってはじめて病人は回復し，そういうケアがあってはじめて幼い者が健康に育つのです。そういうケアがいつもあってはじめて高齢者は健康に生きることができる。キュアだけでは，時には必要なキュアだけでは，回復をもたらすことはできません。キュアだけではましてや幼い者を健康に育てることはできません。キュアだけではましてや高齢者は健康に生きることはできません。

人間を看護するとは—ケアとキュア

さて，ナイチンゲールは，看護の原形をこのように取り出しつつその看護が人間看護であることを強調します。『覚え書』を通じて，病気の看護ではない病人の看護であるということを徹底させていくのです。看護という働きの特性を浮かび上がらせているのです。

まず１つ，看護はその人の生命力を犠牲にしないで自然が働きかけるようにその人をベストの状態におきますが，その生命力の犠牲はからだよりこころのほうに，ずっとずっと起りやすいといいます。だから，看護の落ち度，とナイチンゲールはいうのですが，看護の落ち度はからだよりもこころのほうがずっと痛めつけやすいのです。こころとは，別なところでナイチンゲールも thought という言葉を使っていますが，その人の思いです。その人が身を置く世界です。我々はある世界にいつも身を置いてその中にとらわれています。世界は外にあるのではなく，我々がその世界の中にいる。その世界のほうを，看護の落ち度は痛めつけやすいと，ナイチンゲールはまず，指摘するわけです。人間看護ということをこういうところから浮かび上がらせていくのです。そして，キュアのほうの落ち度はまっすぐからだを痛めつけることを暗示するのです。

ナイチンゲールは人間看護ということ，つまりケアの特性を浮かび上がらせるためにキュア，医の実践とのさりげない対比をやっていきます。

２つ目にナイチンゲールはこんなふうに書いています。その痛めつけやすいこころをそんなことのないように看護は，大事に大事に見つめていかなければならない。看護は病人のこころを丁度ルーペで拡大して見るように見ていかねばなりません。彼女自身がそれを著述の中でやっています。もちろん，看護は病気と治療に痛めつけられるからだをも見ていくのですが，それにも増してエネルギーをかけてこころのほうをみていく必要がある。それで拡大鏡をあててみていくとどういうことが見えてくるかというと，いかに看護するかが見えてくるのです。こころを大事にするにはどう看護すればいいかが見えてくるのです。しかし，それと同時にいかに病むかということも見えてきて，いかに看護するかと，いかに病むかは互いにおぎない合うことだとわかってくる。いかに看護するか，これはわれわれナースの本分です。いかに病むか，これは病人の本分です。両者が互いに補いあうということは，われわれの立場からすればいかに病むかがあってはじめていかに看護するかかが完全になるということです。そこで，『看護覚え書』の中でナイチンゲールは，いかに病むかをいつも内包する看護，それに対し，いかに病むかを外に置く傾向のあるキュア，というのです。

さらに，ナイチンゲールに耳をすませると３つ目に，こういうことも聞こえてきます。拡大鏡をあてて，病人のこころを見ていき，いかに看護するかはいかに病むかを中に抱えこんではじめて完全であるとわかると，いかに看護するかは，いかに病むかに限りなく近いのだ，と。看護は病人の負担を共に担っているということです。そこをナイチンゲール

は，半分引き受ける看護と言う，看護は病人の重荷を半分引き受けると。なにも半分でなければならないというのではありません。半分よりも少なく引き受けるほうがその人のためによいこともあるということは，現代の私たちはよく知っています。ですけど，本質的に，看護が半分引き受けることでその人の負担が軽くなるということが大事なのです。負担が軽くなるということは，生命力の犠牲が少なくてすむことです。限りなく看護はいかに病むかに近い，その人の重荷を完全に引き受ける看護，これに対して，彼女が示唆するのは，その人の重荷を負う力を高めるように働きかけるキュアです。私たちは日ごろ，病人の負担する力をもっと高めようというふうに働きかけるキュアに気づくことがあると思います。

しかし，もっとナイチンゲールに耳を澄ませていくと，このような患者の重荷を半分引き受ける看護も，どんなにがんばっても病人のいかに病むかを100%理解することはできない，と聞こえてきます。病者体験の完全な理解はできない，と看護はわかっているということです。その人の思いをそのとおりに私たちがわかるということはありません。健康な人と病人との間の断層の計り知れない深さをいったのがヘンダーソンさんです。その断層の100%理解はできない，ということを看護は知っています。100%理解にできるだけ接近する努力をする，そういう意識にたつという看護の特性を病気の看護ではない病人の看護であるにつなげて彼女は言っているのです。これに対して，病気の100%理解を目指すキュアを容易に想像できるでしょう。特に検査，検査と検査を増やしていって最後の100%理解になるまで検査をしないと気がすまない傾向のある今日のキュアと，われわれの看護とは性質が違うとわかるでしょう。それはなぜか。私たちはいつでも病人のほうをみているからです。もちろん，医師も病人のほうをみます。でも，いつでも人間のほうをみることはキュアの性質上難しいことがあります。病気のほうをもっぱらみることがあって当然です。

さあ，こんなふうに「病気の看護ではない病人の看護である」を確認して看護の特性をみてみますと，看護（ケア）に対するキュアは，（ケアとキュアは決して対立概念ではありませんが，）つまり病人のこころよりはからだに作用してまっすぐからだを痛めつける，それから患者を外に置く傾向がどうしても強く，また重荷を半分引き受けるよりはその人の重荷を負う力を高めるようにしむけ，また，その人の思いに近づくよりは，病気の100%理解というのをめざす，そういうキュアは，病気１つ１つに固有になるわけです。そして，病人には共通です。Ａという病気，Ｂという病気，Ｃという病気，その他の病気１つ１つにキュアは固有。しかし，病人ということになりますと，同じＢという病気でもＡさん，Ｂさん，ＣさんＤさんとがその病気にかかった場合，病人ということではキュアは共通です。キュアの性質としては，その人がどんな人であるかにほとんど左右されません。そして，言うまでもなくわたしたちの看護のほうはＡさんの場合，Ｂさんの場合，Ｃさんの場合みんな病気が同じでも病人１人１人に固有です。そして，病気にほぼ共通です。看護は，基本的にはその人の病気がなんであるかには左右されません。その人がどんな人であるかに左右されます。

以上のように，病人のこころを重視して，いかに病むかを中に抱え込んで，病人の負担をともに担って，それでもなお病人の体験の100%理解はできないといういわば不確実性に十分絶えて，病人１人１人に注目していく看護は，病人の経過中の変化を丹念にみます。それに対してキュアの方向としては最終的な変化のみをみていくという傾向が強いようです。われわれがいま申しあげたような看護をするならば経過中の変化を丹念にどうしたっ

てみることになります。経過中の変化を丹念にたくさんみるということは，結局はその人の生きていくさまの全てを見守るということにつながります。と，そのような看護は，その人（病気をかかえていますが）の生きていくさまの全てを見守ることになるのです。そういう看護は，常に包括的にインテグレイトされています。その人ごとに積分されています。そして，決して，断片的にはなりません。一つ一つの行為が，生活行動の援助でも医師の指示の実施でもバラバラになされることはありません。ＡさんならＡさんについて，ＢさんならＢさんについて，ひとまとまりになります。

これに対して，最終的な変化，つまり，器質的な変化，病気に固有な変化をみていく傾向が強いキュアは，どうしても断片的になりやすいという宿命を負っています。現在の非人間的医療の原因はここにある，といえましょう。というのは，どうしてもケアよりキュアの方が前面にでてくることが多いので，医療全体が断片的になっているのです。だから，看護がいつも土台になっていれば，いつも必要なケアがほんとうに土台になっていれば，医療全体は断片的にならないでしょう。そういう見通しをわたしたちは持っていなければなりません。

世紀が変わると

―ナイチンゲールの看護を見失う

以上がナイチンゲールの看護です，Timelessな真実とはこういうことをさしていると思います。いま私たちは彼女の看護はTimelessな真実であることを知っています。ところが，ナイチンゲールの看護というのは，19世紀に見出されて，それはすなわち看護が見出されたのですが，そして私は，そこを看護の近い起源と呼ぶのですが，そのナイチンゲールの看護は，19世紀の半ばから一直線に今日につながっているわけではないのです。1893年，コロンブスのアメリカ大陸発見400年を記念してシカゴ大博覧会が開かれました。そのとき，歴史上最初の看護婦たちの国際的な集会が開かれたのです。1893年にはナイチンゲールは73歳です。その頃，73歳というのはかなりのお年ですから海を越えて行けなかったでしょう，メッセージを送りました。『病人の看護と健康を守る看護』がそれです。そのシカゴ博覧会の今風に言えば看護分科会では，看護婦たちはナイチンゲールの看護，今私たちが見てきたような看護を掲げて非常に意気軒昂でした。イザベル・パンプトン・ロブが，ナイチンゲールのメッセージを読上げました。

ところが，その後まもなくから看護をとりまく状況が変っていきます。大きくは２つの変化が急速に起ったというふうに見ることができると思います。そして，それと同時に看護史の舞台がイギリスからアメリカに移るのです。もっとも，歴史は全部がそうです。19世紀いっぱいとにかく，ビクトリア時代という空前絶後のイギリスの国力の高揚した時代まで，イギリスを中心に世界史が回っていました。その後舞台はアメリカが中心で，看護史も今世紀になると，舞台はアメリカに移ります。イギリスはある意味では出来上がってしまうのです。あのNational Health Serviceもナイチンゲールのヒントで早々と生まれたのでした。

２つの大きな変化とういうのはまず，アメリカで起りましたが少し後を追って世界中どこでも起っています。その１つは，医科学のめざましい発達というふうにくくることができるでしょう。Medical sciences，複数です。薬理学とか生化学とかの全部を含んでいます。この医科学のめざましい発達により，癒す力が働くために最善の状態に病人をおく，つまり，生活と衛生を整える，というナイチンゲールの看護はまず１つ，出る幕がなくなりました。肺炎は薬で治るようになりました。抗生物質の発見はかなり早いのです。間もなく結

核も薬で治っていきます。それから，腸チフス，これはクリミア戦争でもはばをきかせた病気でしたが，予防注射の出現で病気そのものが無くなっていきます。そうすると，どうでしょうか。肺炎の患者はナイチンゲールの時代には，特にこどもに多かったのですが，湿度を一定に保った部屋に患者を寝かせ，空気の環境にいつも気を配り，時々外気をいれ，環境を静かに保ち，そしてからだの清潔を生命力を犠牲にしないようにして整えて，ということを看護がしたのです。ナイチンゲールの看護です。もちろんこころを波立たせるような刺激もないように患者を守ることもしました。それが回復への道だったのです。それが薬で治るようになったのですから……。腸チフスは，もうみなさんはたぶん習わない病気だと思います。私が学生のころはまだ，腸チフスの看護というのをちゃんと勉強しました。腸チフスの看護ではなにが大事かというと回復期の患者の食事が大事なのです。患者が異常に食欲を亢進させますから，いかに患者さんがむやみにたべないでなおかつ満たされるようにするかが看護です。ですけど，肺炎の患者の看護と同じくそういう看護は出る幕が少なくなっていったのです。出る幕は少なくなっただけでなくナイチンゲールの看護はもう一つ，薬や機械に取って代えられるという現象が医科学の発達の結果で起こりました。例えば，眠るためのケア，私が学生の頃にはまだ，睡眠薬はなるべく使わないということで，看護婦は患者が眠れるように付き添ったり，温かい飲み物を与えたり，ナイチンゲールが『覚え書』の中に詳しく書いているようにいろいろケアしました。しかし，今の教科書には睡眠薬を投与すると書いてあります。睡眠薬にも色々なタイプのものが開発されて使い方によってまったく害がなく患者さんに安楽を与えることができるからです。睡眠薬が眠るためのケアにとって代ったということができると思います。体位を丹念に換えての褥創の予防というようなことも，アメリカでは褥創予防ベッドが，1930年代から病院に入っていって体位変換という丁寧なケアにとって代った感があるのです。さらに言えば，患者のそばにいること，つまり臨床そのものがインタホーンとかやがてはモニター装置とかに取って代られたのです。インタホーンもアメリカでは1930年のあの大不況の後の病院の発展期にわあっと病院にはいったのです。つまり，ステーションと患者をインターホーンがあるいはモニター装置がつないでいるので看護婦は患者のところに行かなくなったり，それだけでなく行く必要がなくなったというふうに思った傾向があった，と思います。

それからまたこういうことも言えるでしょう。医科学が発達して検査，治療，処置というのがどんどん増えて，患者さんが忙しくなって，なんとケアをうける余裕がなくなったのです。ナイチンゲールのあのような看護，1人1人個別に患者に向きあい，いかに病むかを抱えこむ努力がいつもあり，そして，経過中の変化を丹念にみるという，いつも患者1人1人ごとにインテグレイトされている看護は忙しいということとは相い入れません。その相い入れないものをやろうというのが，今の私たちでありますけど，相い入れないとわかった時点では，看護婦たちもその検査や治療処置のために飛び回って忙しくなっていたのです。そのあおりで一般に世の中の人々は，看護よりはキュアに期待をかけるようになったのですが歴史を振り返ると看護婦自身がキュアに期待をかけるようになっていったのです。看護を忘れて。

こうして，医科学のめざましい発達の結果，ナイチンゲールの看護の価値が見失われ，殆ど忘れられてしまうという状況がおこりました。今日のはじめにお話した中にあった中世のSix Non Naturalsという健康思想が見失われた経過に似ています。

それから，もう一つの看護をとりまく状況

の変化は，チームワーク・ヘルスケア時代がやってきたということです。ナイチンゲールの頃には，病院には，医者と看護婦だけがいました。医者と看護婦だけがいればよかったのです。その病院に第１次世界大戦のあとぐらいから，アメリカの場合ですけれども，いろいろな種類の職種のヘルスワーカーが出現してきます。ハウスキーパーや栄養士やソーシャルワーカーやカウンセラーややがてでてきた各種のセラピスト，それに加えて非常に大量のセカンドクラスの看護婦です。この人たちは看護婦と同じように患者と直接接触して仕事をします。ハウスキーパーしかりソーシャルワーカーしかりカウンセラーしかりセカンドクラスの看護婦はもちろんです。そうすると，そういう人たちの仕事と看護婦の仕事とが重なって境界がはっきりしなくなってきました。チームワーク・ヘルスケアのなかでいったい看護婦は何をするのでしょうということになったのです。看護婦自身もそう思ったしまわりもそう思いました。

“看護とはなにか”の時代

1930年代40年代50年代と，看護婦は何をするのでしょうという疑問がふくらみます。大量のセカンドクラスの看護婦だけでもよさそうだとか，医者がもっと増えればそれでよいのでは，とさえ考える向きもありました。この，看護婦は何をするのか，言い換えれば，看護とは何か，これは看護がチームワーク・ヘルスケアの中におかれたからこそ強く意識しだしたことなのです。そしてこの看護とは何かという問いには，他の職業，主として医師ですが，その医師に従属するものではない，専門職としての看護を確立しようという，看護婦たちの目標が重なっていました。そのころアメリカでは大学での看護教育もとっくに始まっていましたが“看護とは”がはっきりしなかったのです。しかし，看護婦たちは当初は非常に観念的な，今から言えば間違った答えをこの“看護とは”にだしました。たとえば，専門職看護となるには医学にできるだけ近づくことだ，セミドクターという考え方です。看護婦は医師から体温計をとり，血圧計をとり，聴診器をとってというふうにどこまで医者に近づけるかに挑戦するのが一つの路線ではあったのです。実は，そういう部分は現代の看護にもあります。去年の春にヘンダーソンさんの90歳のお誕生パーティーがエール大学でありましたけれども，その席でヘンダーソンさんがいいました。「今，アメリカでは漫画にでてくる看護婦は必ず聴診器を持っています。アメリカではナースの服装というのがそうはっきりしていませんから，病院職員の服を着て聴診器を首にかけていたらそれはナース。医者は恥ずかしがって今，聴診器ポケットにしまっているんです。」みんな笑いましたが，本当らしいのです。

間違った答えのもう１つは，臨床の直接的なケア，食事とか，排泄とか，体位変換とか清潔とかにかかわるケアはセカンドクラスの看護婦がすればよい，専門職看護婦はそれとは別の管理的なことそれから教育的なことをすればよいというものです。本当は直接的ケア行為とは別の管理だの教育だのはありようがないのですけどそういう答えを出した時期があったし，それからまたこういう答えもありました。専門職というのは必ず１つの学問を踏まえているわけですから，当然専門職看護が確立されるということは看護学が確立するということですね。その看護学はイコール人間学であるという広げすぎの，観念的な答えです。

ナイチンゲールの看護をすっかり忘れさっていたから，こうした答えがでてきたわけです。丹念に歴史をみていきますともちろんナイチンゲールを思い出した人もいるのですが，私たちが今日の前半で確認したような，タイムレスな真実としてのナイチンゲールの看護を思い出してはいないのです。

しかし，私はつくづく思うのですが，この時点で，専門職看護を確立しようとがむしゃらに心せいていたこの時点で，例え誰かがナイチンゲールの看護をそのままそっくりもってきて，例えば『覚え書』を持って来て，ここにその答えがあるではありませんか，といっても受入れられなかったでしょう，多分。誰もわからなかったと思うのです，それが，答えだと。なぜならば，今言った看護をとりまく２つの大きな変化，医科学のものすごい発達とそれからチームワーク・ヘルスケアはナイチンゲールの時代にはまったくなかったものだからです。プラスαの説明がなければ，ナイチンゲールの看護をそっくりもってきてもそれが答えだというふうにその時点ではわからないかっただろう，と私は思うのです。つまり，医科学のめざましい発達とチームワーク・ヘルスケアとに関連した学問や社会の進歩をとりこんだ説明が必要だったのです。誰もナイチンゲールを思いつきませんでしたが，思えばナイチンゲールの看護につながるさまざまなサイエンスが進歩して，その進歩した結果を取り込んだ説明が必要な時代になっていたのです。

“最善の状態”をめぐる科学の進歩

まず１つ，ナイチンゲール後の自然科学の発達は，最善の状態というものについてといっても誰もこの最善の状態ということについて研究したわけではないのです，あくまでもあとから思えばなのですが，このナイチンゲールの最善の状態について，それは生理学的な平衡が保たれている状態だと，理解を進めました。食事とか身体の清潔とか運動とかはみな生体の生理学的な平衡につながっています。その生理学的な平衡が保たれている，あるいは生理学的平衡の再編成がはかられつつある状態，それがベストの状態だと自然科学が理解を進めてきたのです。

またナイチンゲール後の社会科学あるいは人文科学の進歩は，ベストの状態とは，もう１つ，これも後で考えればのことですが，心理社会的に生きる人間としての基本的欲求が満たされている状態，それがベストの状態であるというふうに理解を進めた，あるいは理解を深めました。そして，さらに，学問の発達というよりは社会全体の進歩の結果，ナイチンゲール後の人間の社会は個人の存在とか個人の自由，個人の自立そういうことを尊重する度合いを非常に高めたのです。そのことはヘルスケアの主人公は，ケアの受け手であるというヘルスケアの姿勢を強調することにつながっていきます。そういうふうにヘルスケア全体が意識するようになってきました。その中でもちろん看護も，ヘルスケアの主人公は，その受け手であるその人である，という立場を強くしていきます。実はナイチンゲールもそういうことを暗に示してはいるのですけれども，これほどはっきりしてはいませんでした。それで，ヘルスケアの意識がそうなると，ヘルスケアの主人公が受け手であるその人だという姿勢を貫くためには，看護が特にそのことを徹底的に貫く立場にあるだろうとわかっていくのです。ほかの誰よりも看護がそれを貫くことによってヘルスケア全体がそれを貫くようになっていくとさえ予想されるようになったのです。つまり，人々にこと健康に関して何かをしてあげるのではなくて，その人が何かをする，何かというのは健康に役に立つことなことですが，その人がそれをするのを援助するという認識の高まりが一般に起りました。まず，世の中全体にそういう人間のみつめかたがでてきて，広がってきて，それをうけてヘルスケアの姿勢が定まり，それの姿勢を貫く上で看護こそが有用なことがだんだんわかってきたのです。ナイチンゲールの時代よりはるかにそうなったのです。ベストの状態にその人をおくという表現にはこのニュアンス，つまり援助する主体はその人だというニュアンスはそんなに強くはありま

せん。ナイチンゲール後の時代がそこを強めていったのです。

ヴァージニア・ヘンダーソンの看護再発見

以上のようなナイチンゲール後の，看護をとりまく状況の変化を踏まえて様々な看護論が生まれます。それらの中で看護とはの現代の答えとしては，ナイチンゲール後の状況の変化を踏まえ同時にナイチンゲールを踏まえ（なにしろあれは Timeless の真実なのですから）たものとして，もっとも広く受入れられたのがヴァージニア・ヘンダーソンの看護だと私は思います。

さまざまな看護論については授業で聞いていらっしゃると思います。ヘンダーソンの看護ももはや復習するまでもないでしょうが，話の都合上，ナイチンゲールの看護との関係で取り出してみるとこんなふうにみてとることができるでしょう。

ヘンダーソンは，看護は患者１人１人を尊重し，その自立を促す援助であると，その援助を私の見るところに大きく１．２．３とあげていると思います。援助１とは，まず１人１人の患者の生理学的な平衡の保持と再編成の努力への援助です。それは呼吸する，食べる，排泄する，眠るなどの主として身体的な生活行動への援助です。それから，併せて，１人１人の患者が基本的欲求を満たすあるいは満たそうと努力することへの援助，それは安楽にする，保護を受ける，コミュケーションを保つ，生産的な活動をする，など主として心理社会的な生活行動への移動です。これらは，あの Six Non Naturals につながり，従ってナイチンゲールの看護につながるものです。ベストの状態を作り出す援助です。健康にプラスになるように生活行動すること，言い換えれば，健康に直結する生活行動をとりかかり口として人間まるごととしての患者に焦点をあてた援助です。

ヘンダーソンの看護の援助２は，１人１人の患者が医師による診断治療を受ける過程でその人が必要とする援助，というふに取り出すことができるでしょう。

それは，診療における看護の役割といってしまえばそれまでですけれども，しかし，それは，医師の指示を実際的なものにかえて，患者がそれを実行するのを助けるのであって，援助１と同じく主体的な看護援助です。医師の指示を実際的なものにかえる，例えば小児科の病棟で医師がこどもに水分処方をだしたとき，その水分の量をどういうふうに分割して，あるいはこどもに分割のしかたを決めさせて飲ませるか，というところには私たちの判断があるのでして，ただ指示を受けてその通りやっていくのではありません。また，術後の歩行だってそうです。歩行許可ということになりますと，私たちはまず，ベッドの上の起上がりを，それから，ベッドの端で足をぶらぶら，それから，というふうに患者を歩行へと進めていきます。指示を実際的なものにかえて行うのです。もっともっと濃厚なキュアの場面でもそうです。つまり，キュアへの，ナイチンゲールの看護よりは積極的な参加が取り出されているのです。これは，私が仮にヘンダーソンの援助１といっている生活行動援助と実際には合体していて別々のものでありません。ですけど，現代では，キュアが著しく力を増したので，この方向からの，すなわち，キュアを助成する，という方向からの患者への注目が必要になってきたのです。そして援助３はといいますと，ヘルスケアチーム全体の中で生活行動援助と，診断治療を受けていく過程でその人が必要にする援助とを独自の働きとする看護は，必然的に患者１人１人にもっとも近い存在です。ヘンダーソンはこのことを，看護婦はヘルスケアチームの中でただ１人患者と24時間接している職種だといっています。ですから看護婦は，チームの人間関係が患者にとって有利なもであるように努め，それからまた，チームのメンバー

に対して，患者の代弁者になる，これが援助３なのです。

1860年と1960年．

―看護の第１次原形と第２次原形

これがヘンダーソンの看護です。ヘンダーソンは，この看護を説明しながら，援助ということを掘り下げて，結果的にはナイチンゲールとはまったく同じ人間看護の特性を取り出しています。「病気の看護ではない，病人の看護である」を浮かび上がらせています。

『看護の基本となるもの』と『覚え書』は実によく似ています。ちなみに，ヘンダーソンはナイチンゲールの『覚え書』をまったく知らないで『看護の基本となるもの』を書いているのです。でも，結果的にはほとんど同じ人間看護を取りだしているのです。まったく同じ表現を２つだけあげてみましょうか。１つは，その人の思いをなにより大切にするというところをナイチンゲールはその人の頭の中に飛込むといっています。ヘンダーソンは，それを，その人の皮膚の下に潜りこむといっているでしょう？　もちろん皮膚の下に潜り込むというのは常用の表現として，他者のお腹の中までわかるということです。しかし，ヘンダーソンさんに確かめたのですけれど，やはり，皮膚の下に入り込むといっているのでした。頭の中と皮膚の下です。もう１つは，いかに病むかを内包する看護をナイチンゲールは母親的な関心というわけです。みなさん，“三重の関心”をご存じですね。知的な科学的な関心，実践的な，行動的な関心に加えて必ずなければいけない母親的な関心。ヘンダーソンはといえば，あの有名なプロフェショナル・マザーという言葉をつくりだしました。看護婦は職業として母親であるというわけです。

要するに，ヘンダーソンは見失われていたナイチンゲールの看護を再発見したというふうに言うことができると思います。たくさん，アメリカの看護学者がいます。みな似たような気づきをしているのですが，ナイチンゲール看護の再発見者はといえばヘンダーソンではないでしょうか。私が言うところの援助１は特に明らかに，自然が働きかけるためにベストの状態にその人をおく，につながっていると思います。援助２もつまり，キュアとの関係でベストの状態にその人をおくことだし，それから援助３もヘルスケア全体の中でその人がベストな状態におかれるように働きかけていくことであるとヘンダーソン自身がいっています。

しかし，ここで見逃してはいけないのは，ヘンダーソンの看護はナイチンゲールに直結していると同時に，援助の１も援助の２も援助の３も，ヘンダーソンの看護は，ナイチンゲール後の看護の状況の変化をきちんとふまえていることなのです。サイエンスの発達によるベストの状態についての理解の深まり，生理学的な平衡と，基本的欲求の満足を踏まえて，また，その人が主体だということもちゃんと前面にだして看護を説明したのです。さらに，チームワーク・ヘルスケアの中の看護ということもはっきりおさえて，もちろんキュアのパワーの恐ろしいくらいのアップも踏まえて，ヘンダーソンは看護を示したのです。1960年ですからちょうど100年後です，1860年の。私はみなさんにナイチンゲールの看護の現代的意義を知って頂くためには，ヘンダーソンの看護を看護の第２次原形というふうにおくとわかりやすいのではないかと思います。ナイチンゲールの看護が原形にあります。ヘンダーソンの看護は第２次原形です。

再び看護のおかれた状況がかわり……

しかし，まだ問題はつづくのです。ヘンダーソンによって看護の第２次原形が示されたのですが，ここで働いたのがICN，国際看護婦協会でした。ICNがヘンダーソンに頼んで，混沌とした看護とは何かについて看護界に答

えを出してもらったのが実情なのです。ICNがかかわりましたから，その看護はほぼ世界的に看護婦たちの共通の認識となり，それをよりどころにして看護婦たちは自信をとりもどしたのです。そのときはナイチンゲールの看護を誰も意識してはいません。日本では割合早くヘンダーソンからナイチンゲールにいわばもどって，両者を結びつける理解ができましたけれども。ところが，現実には，強力になった診断，治療つまりキュアが引続き，というよりは一層ヘルスケア全体を支配する傾向が強くなっていったのです。看護婦たちが自信をとり戻したからといってヘンダーソンを介してナイチンゲールの看護を再発見したからといって，看護のでる幕は多くはならなかったのです。看護のほうにも力がたりなかったのですが。

しかし，ヘンダーソンの看護再発見から四半世紀たちました。そして，状況はまた変っているのです。1つはヘルスケアシステムが病気中心から健康中心へとシフトしました。シフト，野球の好きなかたはわかるでしょう，だれかがバッターボックスにたったらさっとシフトする，あれです。ヘルスケアシステムが病気中心から健康中心へと位置を移したのです。なぜかというと人々のヘルスニーズが変ったからです。データは今日は省略しますけれども，今日の健康問題の主流は，心臓病とか脳卒中とかがん，がんについてはまだ未知数なところが非常に多いから，ある種のがんといったほうがいいかもしれません，それから心因性の病気，病気とはいえないような心身症，そして事故，そういったものが今日の健康問題の主流です。こういう健康問題は1人1人の人間の不健康なライフスタイルや，生活習慣に由来する部分が非常に濃い，あるいは，また環境公害に由来するものが多い。そういうふうに健康問題の主流がなりつつあります。一方にWHOの天然痘絶滅宣言があるわけです。高齢でなおかつ生きる，障害をもって生きる，というのも今日の健康問題です。こういうものを全部含めまして，現代の主な健康問題に対処していくには，従来の医師中心の，病院中心のヘルスケアでは不適切であり有効ではありません。従来のヘルスケアは，病気中心，医師中心，病院中心でした。それはある種の病気を根こそぎ絶やしました。実際，いくつもの病気はほとんどなくなりました。加えてそういうヘルスケアは病気を早期発見したり，寿命をのばしたりにも，非常に有効なのです。しかし，ライフスタイルとか生活習慣とか環境公害ということには対応しにくいのです。ということは，病気中心ではなく健康中心，医師中心ではなく各種の保健医療従事者のパートナーシップによる，それからまた，病院中心ではなく言うならば脱病院，そういうヘルスケアが必要になっている，ということです。そしてそういうヘルスケアでは，診断治療よりも健康教育に代表されるような手段が，導くというような手段，その人の立場になってみれば学ぶということ，それを主とした手段がもっぱら使われ，有効なはずです。導くその人の立場になってみれば学ぶことへの援助です。だから，そこでは看護の出る幕は多くなるはずです。そもそもライフスタイルとか生活習慣などの現代の健康問題を性格づける言葉がナイチンゲールの看護あるいは第2次原形のヘンダーソンの看護を指しています。

2つめにはこういう状況がみえています。今いった病気中心から健康中心にシフトしたそういうヘルスケアのもとでは，病院の中には非常に重症な病人が集ります。脱病院の傾向にあっても病院という施設は残ります。あるいは病院という概念が少し変って，お年寄りのための施設も含めて，施設の中に病気の人，障害をもった人が暮らすという状況は存続すると思います。そういう施設には，健康教育，言い換えれば導くということに代表される手段が有効ではないような病人や高齢者

や障害の強い人々が集ると予想されます，現にそういう傾向になってきています。そこでは，看護が全面援助に近い形で濃厚に求められていくでしょう。特にヘンダーソンの援助1がまず，それから援助2のほうは，つまり，キュアに対応しての援助ですが，そちらのほうは医学の高度な専門分科に準じた専門分科をした，診断治療過程における看護としておおいに必要とされるでしょう。また，重篤な患者さんばかりであるからこそ，なおさらヘンダーソンの援助3，その人のためにヘルスケアチームの人間関係がいつも有効に働くように，その代弁者として働くことが看護に強く求められるでしょう。つまり，まさに生命力を少しも犠牲にしないベストの状態を整えるというナイチンゲールの看護，それは当然人間看護なのですが，それが重篤な方たちばかりが集まる病院，あるいは障害の強い方や非常に高齢な方々が集まる施設ではおおいに求められるはずです。

それからもう一つ，最近はセルフヘルプ，自助ということが一段と重視されるようになりました。ヘンダーソン以後の四半世紀で一段とセルフヘルプが強調されるようになったのです。ヘルスケアの主人公はその人自身だという考え方はもうすっかり根づいてきました。ヘルスケアはセルフヘルプを掲げるようになったのです。しかし，一方にヘルスケアのコストアップという状況がおこっているわけです。となるとセルフヘルプの名のもとにヘルスケアが人々に重荷をさらに与える危険があり得ます。たとえば入院期間の無理な短縮や，自立なさい，自立があなたの為なのです，といって無理な自立を強いるというような危険がヘルスケアの中にもう見えはじめているのです。と，このような事態では，看護がその原形，ナイチンゲールの看護あるいは第2次原形であるヘンダーソンの看護に強烈に明らかな性質，人間をみる，その人の思いを大切にする，その人の重荷を半分担う，をひるむことなく前面にだして，少なくともヘルスケアが人々の重荷を増やすことのないように働くことが期待されるでしょう。そういう状況がもうきています。実はセルフヘルプは，看護のヘルプがあってこそのものなのです。タイムレスなナイチンゲールの看護を実践していれば，あなたのためにあなたがするのですとか，依存は×で自立は○だとか決していわないでしょう。もちろん依存から脱却して自立した患者が幸せになるのは事実です。だからといって依存が×であり，自分で重荷を負うほうが○であるというように，単純には考えられません。

いま私たちの看護は

ヘンダーソン後の四半世紀の状況の変化を3つあげましたが，このような状況に置かれている私たちの立場を考えれば，タイムレスな看護の真実が今本当に，出番をむかえていると思いあたりませんか。タイムレスな真実の看護の働きに光があてられてきたというふうにみることもできるでしょう。ヘルスケアの健康サイドへのシフト，病院の中には非常に重篤な方が集っている，施設には非常に高齢な方や障害の重い方が集っている，そしてセルフヘルプという概念の強調，そういったことはみんな看護の原形につながっています。ナイチンゲールは生きているのです。

ただ，今日のようにタイムレスな看護の真実の来しかたをたどってみると，私たち看護婦が状況の変化の中でそれを見失いそうになる可能性がある，ということに気づかねばなりません。事実これまで，見失いそうになる危険性があったし，殆ど見失いそうになったし，また見失いもしました。今状況が変わって看護は出番の時をむかえ，私たちがきちっと看護の実力さえもっていれば存分に看護できるのです。けれども，また状況がかわったら真実を見失いそうな危険もある，ということに私たちは気づかねばなりません。例えば，

介護とか福祉とかの概念と実践の高まりの中で私たちは看護を見失わないでいくのです。また，いったいに管理主義的な行き方や効率主義，セルフヘルプのいきすぎはここからくるのですが，そういうことが評価される傾向の中で，私たちが真実の看護を見失う危険がまったくないかというと，どうでしょう。

そこで，結びに，アインシュタインの言葉を一つ引用します。「“真実というのは砂漠の中にある彫像のようなもの。”知った真実を見失いたくなかったら，砂にうずめてしまわないように，絶えずよみがえらせる努力をしなければならない。」Timeless な真実の看護を見失ってしまわないように，今日のようによみがえらせる努力をしましょう。

みなさん，一緒に考えてくださってありがとうございました。

本稿は1989年5月27日，金沢大学医療技術短期大学部看護学科で行われた講演をもとにしたものです。——事務局